西方浄土

十四

1 25
310
13

帝国
第34
巻15

おうりまま十四はち巻

はるゝ〳〵 橋十四

第六集乃一の巻ふ巨勢山ちつらゝ椿はるゝ〳〵ふといふ歌

おもしろき巻。和歌もよろしかるハ。

世界をはるゝ〳〵はなぎつゝゝふ

思へだおもふおとぞおかるる

さるハとうろうへうろうもはるゝ〳〵なべてはちは世乃ゝゝ春し人

のあてさるはよりあしき事ふつゝて。おふ事知ゝ思ふまゝはちゝふ

こゝゝがゝゝたゝをゝ〳〵世世ゝくふも。ゝゝる姫しゝとおふゝ。ゝ

いひてゝ。はるゝ〳〵べくもはるゝ〳〵べるむ。

君を弑せ奉り父を弑せ奉りたまひのまゝ

書紀履中天皇條に曰ふ。刺領巾といふ者。已君住吉仲皇子を刺殺し奉る。崇峻天皇條に曰ふ。蘇我馬子人をして天皇を殺し奉りしむ。天皇弑せ奉る者は此蘇我奴をおきてハ他なし。眉輪王の安康天皇を弑奉りしハ王子なり。又御父の仇ふ坐しぶ同じさまふハヤしがくしに。景行天皇條に曰ふ。日向の市乾鹿文といひし女。父を殺さしむ。雄略天皇條に曰ふ。樟媛其夫弟君を殺す。但し此二つハ朝廷乃ハ免て。忠義の志ふ深かりしハ。記紀ふ明ら也。

喩。其子武彦を殺す。推古天皇條に曰ふ。庵城部連枳苔つ。おかゝ。ほまゞ事ぞと。書紀ふ見へる。和づふ。これ

のゝ事ぞ。此國乃周といひし代よりこと形と学ふ。君を殺し父を殺し奉りしもの。世ごとふ多きを。いと多きを。さ思ひて。ふかゝみよきを。さ思ひて。ふかゝみよきを。さ而しさ又道の驗乃まさりおるをも。さ思ふべし。かの周公旦道をつくりそなへて。君を殺せ父を殺せとハ。教へざるなり。おのづからかくなるべき。

祈ふ祈して皇子を求め給ひしに

同紀継躰天皇條に曰ふ。大伴金村大連奏請曰。云々。請立手白香皇女納為皇后。遣神祇伯等敬祭神祇。求天皇息。允答民望。天皇曰。可矣。とて。いふ。いふ。のゝ。かくなり。世嗣を求ふ。祈ふ祈ふ請祈をべき。

百濟國をして天降て國を建て神を祀らしむる

同欽明天皇に曰ふ。十六年春二月。百濟王子餘昌。遣王子
惠奏曰。聖明王為賊見殺云々。蘇我臣問訊曰云々。惠報
荅之曰云々。蘇我卿曰。昔在天皇大初瀬之世。汝國為高
麗所逼。危甚累卵。於是天皇命神祇伯。敬受策於神祇。祝
者迺託神語報曰。屈請建邦之神。往救將亡之主。必當國
家謐靖。人物乂安。由是請神往救。所以社稷安寧。原夫建
邦神者。天地割判之代。草木言語之時。自天降來造立國
家之神也。頃聞汝國輟而不祀。方今悛悔前過。修理神宮。
奉祭神靈。國可昌盛。汝當莫忘。と云々。この言。伝聞はいま

まこの時ふもろこしにいとかしこきさとりびと。自天降来造立國家之
神とハ。須佐之男命なるべし。扨代にハ。今韓國ふ天降坐し
よりこれをいう。

おほやけこきしふ神子と詔ふる事

同孝德天皇。沙卷。高麗國の使ゑ詔ふる大命ふ。明神御宇
日本天皇詔旨。天皇所遣之使。與高麗神子奉遣之使云
云。うちの王を。神子とのたまへり。こまも神とハ。もろ〳〵の國を建し神をい
ひて。子ハ。ものの末のよしなり。明神と詔ふふ對へ。天皇乃
子と。親て詔へる。いづれにかあまを漢文の詔ふ。をづ〳〵おむ〳〵き
ふ。

異國の使に神酒を賜ふ

同舒明天皇の代に四年唐國使人高表仁等到于難波津云々即日給神酒玄蕃寮式に凡新羅客入朝者給神酒とあるは神酒のことなり其釀酒料稲大和國賀茂意富纒向倭文四社河内國恩智一社和泉國安那志一社攝津國住道伊佐具二社各五束合二百四十束送住道社大和國片岡一社攝津國廣田生田長田三社各五十束合二百束送生田社並令神部造差中臣一人充給酒使釀生田社酒者於敏賣崎給之釀住道社酒者於難波館給之とあり抑此神酒を蕃客に給ふことは皇后乃ち此神功皇后乃ち此神功

ゆゑよりはじまる事なるべし

神社の位階のこと

同天武天皇の代に軍政既に訖て將軍等奉是三神教言而奏之即勅登進三神之品以祠焉とあり品とは位階をいふなり

○神社に位を授ること物に尽くる始なるべし

○さてどこまでも必ずしも位階ばかりでなく社の班列をあらはすべきものなるべし

○三神の教言は件の文の上に出たり

左右京朱雀路朱雀門大極殿瓦ぶき

京都を左京右京と分ちたるは藤原宮既に然りと見えたり大寶令にもきこゆる令に左右京職あり續紀大宝三年に処に左京職云々のこと見

えたり。又和銅三年正月の処に。皇城門ノ外朱雀路とみえたり。これいまだ平城にうつらせ坐ぬさきなり。朱雀門ハ。既に孝徳天皇の。大化五年の紀にみえたり。又大極殿ハ皇極天皇四年の紀にみえたり。但し其ハ當時ハたゞ大やすみ殿といひて。いまだ大極殿といふ名ハなかりしを。後の名をもて記されしも知りがたし。又齊明天皇元年ノ紀ニ於ニ小墾田ニ造リ起ニ宮闕ヲ擬ニ将瓦覆一とあるハ。ではかりなれども。宮闕の瓦ぶきハ。これより見ゆるべし。又五位以上及庶人の屋舎乃瓦葺ゆるさるゝも。神亀元年ノ紀にみえたり。

南殿

續紀に。天平八年春正月丁酉。天皇宴ニ群臣ヲ於ニ南殿一ニ。まで

同廿年春正月戊寅。天皇御ニ南殿一ニ宴ニ五位以上ニ一とあるも。この南殿も。後のごとく紫宸殿の別名なり。もとより其の名を南殿なりしゆゑ。後に紫宸殿とハ名けられたるなり。大内の殿門の名。大極殿朱雀門をおきてハ。漢やうなる名ハ。奈良宮までハ見えざることなりし。たゞ大安殿小安殿内安殿外安殿などいふ名のミ多く見えたれバ。もろもろの殿門の。漢やうなる名ハ。今の京になりて。始めてつけられしにや。

書紀ノ欽明天皇の巻のうち

書紀の欽明天皇の巻。二十五の葉に。夏四月安羅云々といふ条より。五年十九のひらなる。可ㇾ不ニ深思ニ而熟計ㇻ歟といふまでのあひだを。しかも百済王が。任那国をおこし建むといふよしの事。詳かなるまで。

[illegible]ざる記して。他(アダシコト)[illegible]
[illegible]
[illegible]
云々といふ。十の蓋(ヒラ)は。豈足(ムヤ)云乎。半(ヒラナカラアマリ)餘の[illegible]。記さるべき事也。[illegible]餘(ホカ)をみる去(ステ)ても可(ヨ)かるべし。おのもこの[illegible]

風土記のおくり

續紀に。和銅六年五月甲子。畿内七道諸國郡郷名。著(ツケ)好字。其郡内所生。銀銅彩色。草木禽獸虫魚等物。具録(シル)色目。及土地沃塉。山川原野名号所由。又古老相傳舊聞異事。載(サテ)于史籍(ニ)言上(セヨ)。[illegible]風土記のおくり。畿字[illegible]上に詔字脱[illegible]。

婦女(フミナ)髪(サダメ)の制

書紀に。天武天皇十一年四月。詔曰。自(ヨリ)今以後。男女悉(カミ)結髪(アゲテ)云々。六月丁卯。男女始(テ)結髪(アゲ)仍(ヲ)着漆紗冠。[illegible]十三年閏四月。云々。又詔曰云々。女年四十以上。髪之結(アゲ)不(ル)結(アゲ)。及(ヒ)乘(ル)馬(ニ)縦横。並任(セヨ)意也。別(ニ)巫祝之類。不(ル)在(ニ)結(ル)髪之例。[illegible]朱鳥元年七月。勅(ス)。更(ニ)男夫着(ヲ)脛裳。婦女垂髪(スベシモトバリ)于背。猶如(クセヨ)故。[illegible]

[illegible]朱[illegible]元年の勅に。天皇大病(ヒ)[illegible]祈[illegible]

わゞ[illegible]ば。此女の髪の[illegible]。沙代(テリ)より風を改め結べる事(カヒ)畏[illegible]

ひてふやうに成かくて又續紀ふ慶雲二年十二月今天下婦女自非神部齋宮宮人及老嫗皆髻髮語在前紀上至是重制かくのごと此佛制つゝしみ行ふべしとおぼゝしくて中古ふるきをべて垂髮ハ紀ふ近き代ハ又髻ハいつのふぞより始

柑子

續紀ふ神亀二年十一月中務少丞從六位上佐味朝臣虫麻呂典鑄正正六位上播磨直弟兄並授從五位下弟兄初賫甘子從唐國来虫麻呂先殖其種結子故有此授焉と云ふ甘子ハ柑子なり

短籍

書紀齊明天皇紀卷ふ或本云有間皇子與云々取短籍卜謀反之事と云ふ短籍と云物ハ如何なるものぞ

續紀十七卷ふ後の書ふもまゝ見えたり後紀ふも

云々と云てよ物ハ限らぬ行ふふれ

云物出し但し云ふくハ卷ふ後のこと

裳瘡

續紀ふ天平七年自夏至冬天下患豌豆瘡俗曰裳瘡天死者多

こゝ皇國にて裳瘡ハ昔ハ疱瘡ハ

延暦九年ふ是年秋冬京畿男女

年三十已下者悉發(スル)埦豆瘡(ヲ)俗云裳瘡(ト云)臥(レ)疾(ム)者多其甚者(キハ)死天下諸國往々而在(リ)々る埦字ハ碗を誤るなるべし此瘡の名ことゝ
ゝり後の書ゆゑ皰瘡といふ皰疱ひとしく今の俗ものがさといふハいとゞさとも省きこ
又いもとゝいふさゝバ芋もがさといふハいとゞさとも省きこ

諸國郡の圖

同紀ゆ同十年八月令(ム下)天下諸國造(テ)國郡圖(ラ)進(ル上)

五日ゆ節菖蒲縵

同紀ゆ同十九年五月丙子朔庚辰太上天皇詔曰昔者五日之節常用(テ)菖蒲(ヲ)為縵(ト)比(コノコロ)来停(メタ)此事(ヲ)從(レ)今而後非(レ)菖蒲縵者勿(レ)入(レ)宮中

味醬(ソ)

三代実録四十九ゆ味醬二合と見ゆ此ものゝ如きてゝ
和名抄ゆゑ未醬楊氏漢語抄云高麗醬美蘇今按辨色立成説同但本義未詳俗用味醬二字味宜作未何則通俗文有末榆莢醬末者搗末之義也而末訛為未未轉為味云々といふ和名抄一本ゆゑ未醬の未字末と作アリ近き古新井氏の説ゆ韓地の方言し雞林類事に漿曰蜜祖々いふ言麤醬なるべし味噌なるべし未醬と味噌と同物の説ゆ

万葉集ゆ

茅紫集は奇ふ嘉名とも名づく。是こハ後の考ふハ嘉と書
とのこゝふよめどと茅紫ばかりハ。みなゝ〳〵嘉のこゝ。市まバ七ゝ巻十ゝ巻
あゞ〳〵ふ。詠露といふ奇ふよ名なり。多る中ふハ。嘉と書て二つゝ〳〵ん
る。やまのやうなるをつまゞ。そまもみな紫ハつゝ〳〵ば。〳〵で嘉ふ。こゝふ
まゞ〳〵。流あまゞる。皆つゝ〳〵ば。そゝ〳〵〳〵で嘉を。書書といふむこゝハ。
いふゞや。やまゞまゞる。此名ふらを。ふりて。志毛といふ。もゝハ嘉
をもかゞ〳〵る。物名ふて。まゝ〳〵ふ氷らでわる成。都由志毛といハ。省きて
都由〳〵のゝ〳〵いふ。そハ都由ハ粒忌のゝ〳〵。少て。忌とハ。清潔なるを云。
雪ゝ由と同じ。市まバ清〳〵とハ。粒ぶちて清〳〵なる志毛といふこ
〳〵ふゞ〳〵る。

寝ゞ寝ゞ起てゆる城張といふ。
百葉集二ふ居あり。て君をバまもむ。ぬゞ〳〵ゝ髪ゝ集ハふる
〳〵と。十一ふ。ゝ袖もち来〳〵ちゝ〳〵ゝと張〳〵ひぶふ月かゝ
ぶきぬ。十八ふ。平宴安加之〳〵ひゝのまむ。彩〳〵ひまむ。あ〳〵ハ。ゝき和
〳〵むゞ。ゝふ。ゝ和おもゝ〳〵を。ゝゞ手礼婆〳〵ゞゞ。ゝ〳〵〳〵ゝ。
えゞ〳〵ゝ。ゝふ。ゝ。あり。大〳〵ゝ。此〳〵ゝ。ゝゞひの張ハ。ゝゞ一〳〵ゝの。ゝ〳〵
つゝふ〳〵ハかゝて。寝ゞふ。起て張〳〵ゝ。ゝ〳〵。ゝ〳〵〳〵ゝゞ

人の名の和字ゝ

人乃名ふ。和字を。加受とよむゝ。ゝゞハ加都ふて。都ハ清ゝ。
此言ハかゝて。かつかつゝと。活用て。物を和合〳〵し。万ゝ〳〵ふ。醤酢ふ蒜都

伎合而(カテ)といふは合而(カテ)なり。

一言一行によりて人のよしあしをさだむる事

人のうへ一言(ヒトコト)一行(ヒトワザ)によりて、其人のすべての善(ヨ)き悪しきを定めいひ
ふるかく書は清みなさるべきを、さだめていひつらねてし。すべてよき
人と見ゆれ、まつ経をもとわかりかねぬことなども、まじらはぬあら
ず、悪しき人といへども、よき志もまじりて、生(イキ)涯かぎり
の志なるべき、又大かたにとはまぎらはしき人もなき
ものなれば、ただ一言一句によりては定むべき。

今の世人の名の事

近き世の人の名字は、名に似つかはしからぬ字をつくること多し。又すべて
名の訓を、よみつらねがたきを、さまざまにいふ。近きころの名のりは、おほく世にいふや
しれ字がゆゑしれ訓をて、いふにもととかくれぞ多くうかがふ。すべて名
そいふにて書きうるも字は訓のよくたてるにてそよきことこれに
名をいふを、いそゆる名乗実名也。菜名(十二)落つ菜(十二)会語は名がひの名のこ
とふはわるし。されて文字人の性(シヤウ)といふにあらずせて、名はつらぬいふに
もそるゐ。是なるなくひし。すべて人に必性あり。性といふべきを。
さらに離るをわり。文名の字は、反切といふことをえらぶも、いても。
反切といふにもあるし。字は書をぬきさしも料にてそいふも、いそぢは人
の名にとにいつぐら登。

紅梅の仮字

和梅の假字。實成ると成時ふさごとだんと実べるまで。法ものうハ
ことをぞつて出べし。結き実柏名の字ふこと成。子をバいでう生むと
ちうもとよりそう成。此時かのふ字を平ふをいてよりそうものとんがるハ。
しめがつて。こちもとよりあるふ。ことをぞんといひもし。ちとせし。古今
集柏名ふ芭蕉をんぐせをバとちそうとはぐ例し。又和名抄り。禊
祓阿乎之と云て。他のふり。ひをといつる。此ものびみを。字の韻を平
となふして。やぐて訓ふしちるふて。焼心の美錢菜などの示のおし。

鹿をかせぎといつる

鹿成うせぎといつを。たの名と思ふれど。此名を見て古ふ云ふ
て。ふしちるふ和名抄の俗坊具の中ふ。鹿杖とい

ふ物を所望て加勢都恵と云せるハいかゝ。

牛を殺して漢神を祭ること

續紀ふ。延暦十年九月。断伊勢尾張近江美濃若狭越前
紀伊等國百姓。殺牛用祭漢神と云て。漢神ハいかゝる神
ふらるけぞ。書紀を極天皇元年ふ。祝部どもの殺へ〳〵ふ云て
牛馬を殺して。社〳〵ふ神を祭りて。雨を祈ること云て。牛を殺こ
ろして。神を祭ることハ。ものうこの俗ふ云へるもと。谷川士清もいを
ひて。

氏族を腹といつる

書紀清寧天皇元年ふ其腹所生星川皇子と云る。腹ハ。氏族の

ウヂ宇遲ウガ宇賀良ナドヲ列ベ、又欽明天皇ハ皇子ニ韓腹
推古天皇ハ皇子ニ八腹臣等ナドヲ生ミ給フ。續紀ニモ、此二ツ
三腹遍任ス、此ハ臣八腹氏、四十ニ、自餘三腹者、マヽ其入
彦命子孫、東國六腹、朝臣云ヘリ。姓氏錄秦忌寸條ニ、秦氏
等一祖子孫、別ニ數腹トイフ。皆日ノ子ニモアラズ韓國ヨリ出ル
ヲ称スベシ。ウヂ氏ニモ郡ヲ評トイフナド、此ニ見エタリ。

孔立を文宣王といふ

續紀ニ、神護景雲二年七月、大学助教正六位上膳臣大
立言、大立、天平勝宝四年、隨使入唐、南先聖之遺風覽膠
庠之餘列、國子監有兩門、題曰文宣王廟、時有國子学生

程賢告大立曰、今主上大崇儒範、追改為王、鳳德之徵于
今至矣、然准舊典、猶称前号、誠恐乖崇德之情、失致敬之
理、大立庸闇、聞斯行諸、敢陳管見、以請明断、勅号文宣王
といふ。孔立を文宣王と号ス。皇紀かゝて八百四十年ばかり。

姓のかゞゝふ骨字次考

姓のかゞゝふを称を、後云ふ尸と。八ばかりやうなるもの。續紀十八ニ、
雀部、部を真人等が中ニ文の中ニ、遂ニ絶骨名之緒、永為無
源之氏といふ。たゞ骨ふる事なれば、尸字ふる行ふるなり。

伊勢大神宮寺

續紀ニ、宝亀三年八月、徙度會神宮寺於飯高郡度瀬山

房にまた同十一年二月神祇官言伊勢大神宮寺先為有崇遷建他處而今近神郡其崇未止除飯野郡之外移造便地者許之

皇太子伊勢大神宮に詣給ふ事

同紀に宝亀九年十月丁酉皇太子向伊勢先是皇太子寢疫久不平復至是親拜神宮所以賽宿禱也まゝ延暦十年十月甲寅先是皇太子枕席不安久不平復是日向於伊勢大神宮縁宿禱也十一月丁卯皇太子自伊勢大神宮至こゝに一度の事なり成史乃まき給ふ宝亀と延暦と二度記るとなり いづれにかをそ今知ぐ

交野乃渉狩

同紀に延暦三年十月乙巳朔戊午行幸交野放鷹遊猟とあるに交野の狩こゝにやはらむ

新撰字鏡

新撰字鏡はかりて号ふまつり給ひなりしに先づ近きころ出て古へまさるとはいはまほしく用ふるを行つゝ人乃拙きかうきむかど序は文のいと拙きにて書しそはまげき字ども多くはふるがもびいうしくて かう出はさるふるいとけいうへ今はふるどもかつてあるぬぞ多くて序は中に皇國の諸書私記の字漢國乃

教疏字書の文を取れるよしいへるハ、いかなる書どもより取出せるにか、いづれもしられぬことし。文字と注と訓とおのおの悉く合ておなじくハ、あひかなはざるべきことをつゞき出るぞ有ける。然れども後世の偽書にはあらざるぞ。序に見えたるやうに、寛平昌泰のころの物とも見えしかば、さる類ひ掲きなぐし、時代の上つかたなれば、おのづから訓どもなお古く見えて、和名抄よりはまさりて、めづらしきことも多し。すべて彼抄をしるさべき事にて、抽出すべきも多し。人のかならずしも見べき事にぞ有ける。但し古き件のごとくなれば、字文注も脱誤りて多し。されど訓のかぎりは然るべきこし。文仮字だに正しくて、皆古書と合へり。美麗を宇流和之と書る一つもあやまれるハ、いかなる事にか。又他の書にはかれて安

りもしらぬ仮字など、此書に出たるも多かれど、それは誤なるべし。

後撰集拾遺集のこと

後撰集冬の部に、同じ月の年のうちに春たちければといへる、詞書はあやまれるにて、しかなり。此歌は十二月に閏月ありける年にて、此月は閏十二月也。年のうちに春たつとは、十二月の一年に余りて、閏月のあるよしにて、立春は月の事なれば、いふにたらず。然るを正月なれば、正月なるべければ、詞ハ誤べきもあらざるよしにて、抄の説、誤也。三の句しらざらばとあるも誤也。又拾遺集に、大嶋の鳴瀬をこえし人の、まへやよしもへしの事見えてしかるを、神名などのもじ、今本にはなきとあるは誤也。又二の句なをば思ひしとあるもむかしく。思ひて結びを集にみえしは、古今仁徳天皇御歌に見ゆ。

又ゑ五ふかくぶりの係き色ふもうつうを狂ゑきくれ家くいてうあ
きくくハ諾くいうしてこ好くのいつ聴いくくふいひうまくうあし
又雑二ふみくぶくふまと好ひくる嗟咏后うつうをぬんの係くをりれば
くうらいつる花ゑふあつるちくく上白ハにみぶうくれ家みぶをおきをりて
ふへんをうつくれくをぬうくん下白ハこうくれ女にゑ文ゑくちおくをゑ
中ふそわりてたにゑぶくを係くかくゆるくくふくくこの白をふちる
ゑくいうるハ猶くん一をふあるゑくいつるぶよに拾き系別ふ白かうをて
くゑぶ思ふ係るぎぶれ系洲よりうぶくくうちのくくて惰くと鴛
ふいひうきて叡羽くいつり駕ふさいふ羽わ白ばくくくくハくぶ叡の身と
係ぶ宣む料のくくんよりうぶくくへくるくくふちいつぶ此系よくくせ

ぶハまがひゆべくくよりうぶくくとハ結をぶひよくくを係くぶくくれのうぶくる
ちくくくゆきくうくんくまて思ゆを思ひくくゆる年ハ係くん思ひくくるくいひうま
くうるふあくくび又三の白れのくぶくふと思るゆぶくくし

奈良れ大佛像よりれ流血ゑ為くくる

外記日記ふ長保四年十月一日云々次召陰陽寮於陣
腋有御占是依東大寺大鐘九月廿一日巳時濕水如霧
流申尅大佛御身悉潤濕自頭如露而降如水流連花座
上解文也

仁壽殿顛倒事

同記ふ久安六年八月四日午刻大風折木終日不止云

云。大内裏中仁壽殿顛倒。近年内裏殿舍。拂地顛倒。所残
此一殿也。今亦如此。可傷々々。

美福門院石清水宮に神輿を献りたまふ

同記に。同年同月廿四日云々。是日。美福門院。調作神輿
三基。被献石清水宮。文章博士藤永範作進告文。以判官
代遠江守惟方為使。件事代々。后宮必有此事。上東門院。
后宮之時。始有此事云々。而后位時。無其沙汰。今雖為院
号後。不可黙止。被調献也。

かゞみのかけを筐

常に鏡をいるゝかけを筐といふことあり。拾遺集十八の巻に。志乃
びける人のもとにつかはしける平公誠がかゞみのかけごがきにえ
てしがな。きこえと人にしらすべく。よもぎまでたには。来而有に
てみのうきは方ハ。よく塚の御のことも。

絵の事

人の像を写すことハ。つとめてその人の形に似むことを要す。面や
うちまもらにもいはず。その形すがた衣服のさまにいたるまでよ
く似らむとなるべし。さらば人の像ハ。つとめてくはしく写
さにうつすべきことなり。然るに今の世には。人の像を写すとて
も。みなおのが筆のいきほひを見せんとし。絵のさまを雅にせ
むとするほどに。まことの形にはさらに似ず。又真の形に似む

ことをば要せざるべし。筆の勢ひを失せ、絵のさまを雅ふせんかまるるふをもつぱらとするなり。きべてこやしそだてたるしるべさるべし。
とかくゆゑふ面やうなどそのかたちなるべし。甚いやしかた賤やまがりのかたちやうみて、さしふ君子有徳の人のかたちきふ所なるべし。これいとふくむべきことなり。

又

古人の像をかくあるべしその面やういふのりきむ知るべしれば多べその人の位ふ有ある人徳ふなへて位多ある人の多べ面やうきべてのさまけさうくまことふ多ある人やうふゆるやうふきべく徳あわるべ人ハ又その徳ふ有へてかくべし然るふ後の絵師これ

きを思べきべおのが筆の勢ひを失せむやうのべするなどふ位多ある人徳ある人も多べきべ山ずつのめく愚昧なる人のめくかきなせり。

又

かたちよりも女のうるはしかくとても例の多べおのが筆のいきをひをのべむやうしてかくなどふそのうほえふくやうなり。あまりまえうべくかほのかきべ絵はさまいやしくみるべきいふのれば。そもおのが絵のつるみれたなり。のれよくて名のさまいやしうぬやうふこそ出べそれ。己が絵ずつれいやしくなるをひをひてかほよりも人をえふくべきいきれなり。美女れ多きいふもく

うれよく かくべきなり みみく やうなるいとく ゐづきなり 仙ー
今は世ふ江戸絵といふ名なれど そこひてのあのごとふかれよく せん
やまるなどふ名のさほのいやしれるすさまあもいはぞ 中くふ
かれえふくええそとつるあきことおもし

又

世ふ武者絵といひて あきれ人の戦ひのさほをかく そうほやう
人やもええぞ 目九く大きふ 鼻いりロおちきふて まべて鬼のめ
しいふあきれさほをえせむ てまれぞとて 人ふもつるぞ もう鬼の
やうふハ出べきまざうハ あぐおぐやふ人やうえて もうもあきれい
きをひるさほふこそかくべられ 或かう書ふ皇國め繪れ事ハ江

るふ その人 夜又羅刹のめしやいて 思ふこの鬼れめくかける武
者絵をそていつるなるべし されどうちふ人て皇國人のさほをぶ
ええしひばさらつる書をよみて 日本人れ名をまべてみれ 鬼の
めくなる れとぞんれらむ まべてのる 皇國人をあうくれ
るハかくふれめくの書をよむゆえふ よくもれるを そうろ
こしくハ 皇國の書をよむこやなきれば 皇国の事ハもこば
まくあてうれ國の書れ中ふいるこそうれば それを定(デウ)
てんれうこそぞう 皇国れ人物の絵も 異國れ人のえてて
そををでうとそるこやなを ふの位ゐる人のふれ山ゲ川の
ごとくいやしくいきなり かれよれ女のうれをえふてかきなせる

などを異國人のえがくむかし日本人え形いやしく女もみなえ
ふくきこそぞやそぞんじべきこえ異國人のこゝろもいかゞ同じ
皇國人ふるも古へぬ昔の人のかゝれを繪ふうきるを一度えれば
おのづからそのおりうぎをそのえれと思ふる拙ぞかし

まくら

枕の草紙のことハさらふ古へねど中かくつづきふあるざるふ
似ゝれども夜ろづのごとおのづよれいかきえ古へでかゝる
ようハよくえゆるものなり也ろくれ藝などもそのでうそて
拙の道の人も為ゝふえ古へで人てて他よりよきいかきさ
法のようくえゆるこゝなり繪もきるんぞくいかれで今おのゞ思ふ

きゞをいふなり まゝ所ゝ法とそろこれ古より代ゝの繪の事
も あまるもえいつ先きゞくはゝく古へ拙ゞさしあきて多ゞ
今の世ふつゆふえおよぶところをもていはんそれまゞ墨繪う
古へざいしゝ紀おくざいしきなどゞさ法ゞいる中ふ墨繪とうよた
多ゞ墨を墨ゝと出て筆勢古へ形くよろづをことそゞゝ
うろゞゝやく紀て その拙と えゆる こと多ゞ筆のかいきをひを
えせゝる拙なれゞ墨えて上よのうきるえ げふあうも出べし
中おゞえて えどころいるもあ墨ゞおしあくて繪師のうを
るえ えゞところなくんづきあきものなり さるを世の人多ゞ此
墨繪をことふいみゝ紀こゝふしてめづるえ 世のあゝひふ古へ

かふんにて。あることにたへなどころなきものなり。近き世に茶の湯と
いふことを好むとも。がらなど。殊に此墨絵なのみめでゝさいしれ
絵をまべて世にしらぬ。これもその人々。まことに志かとひとはらに
えならず。かゝず。その道の趣のさだめおきつるんだへを守りて志
ゝらあり。まべて此茶の湯にめづる筋え絵も書も。さらにみじところ
なくおうしらぬものなるを。かゝくまもりてあやむいひとしかゝく
あらるゝことなり。さてうちきらし。えなつかしくやかくびておかし。
むくきらしきとらふにいてりてえ。物によりて見でゝるもなり。又それ
にえあまりこちく。みえてうるさえ所もなる所わ水を紺青をゝ
押してかきるまぐひ。ことにこちらし。さて絵の流さ法ではなる中に。

むかしよりこれを業となしてある家々あり。大かた此家々の絵ハ。
その家々に伝ありて法をのみ守りて。少しもその他の事を
とのさ法をだに守るをば此家とし。まちの絵にはよろしとなりなし
きことなり。まづかれ位ある人のかれのいやしげにみえ美
女のかほふくよかにしてみなふくきれど。いとしくところづきなし。又
人は衣服のきえ。折目などの筋をいかにふとくこけるもかく
となり。これらみな筆の力を見せむとするこゝろざしなるべし。
ところどころの松をかくに一種ある松となして。必ずことなる松をかく
を。名所に昔しかれ画人のかきる絵にある様は松なりけ
むをならひつたへるなるべし。これからふにさやう玉川の一種

いるゝふもあるべし。多く世のつねの松なるを、かきそこなのつるなきなかに、ちるをよそにてもふして、守りてかきつるべくいとをこし。大うもろくみな絵の中ふらうくんづきなれば、ほそくかきる墨繪このかち松、人物の衣の折目の筋ふとき。さてもあるべし。布袋、福禄壽などいつものくかき、まべて是ら、一目ゑるもうるさく、二度とゑやしんともおもえるべし。大うる舊き定めをまもるもいやよのれこそなれども、そハ事ふよりも、拙ふこそよるべうれ。絵などハ必しも絵るべうるに、他のよれをゑて、うつるこをいふさるをいとかるなくて、さかせ又、家の法といふ中ふいとくおろしく。まことふ、屋上を去て内をゑまるる

雲をゑがゝて、遠近をとりあつめ、きらびきことゑて、その法ふもづけても、いやもあしきるもおふくして、今時のそろうまゝ世てしうれちうこそ、ものの、及びぐるもおふうらし。又今の世ふ、もろこしふわたりまゝびるさゑ、いかりそのたうこうも、まづ何をかくふも、まこやとの畑のやうをよくゑてまゝびかくこれを生うつしとういふ、こもまろやふよろしうるべくおぶゆるこのうちの、志ろ(ゑ)ぶも、まこのの畑と繪とハこゝるこもいかりて、海こやのいるまゝふうれてたゝりて其物ふ似ぶしして、あしきこともいるの畑ふ、故ふ此家ゝりた法ありて、このゝぶもの畑のまことけまくふハかもぬる

あるあり。これ法のいみしくしてまさぐる紀地なり。まづ山水とふ繪。まべてこの家くの絵よろしくところ〳〵やうはいとゝわろくこちなくえぐる紀ことおろし。これその法ふよろぐしてんゆまうたてかくゆゑなり。はるひて道あるまぐ紀和ふ道をかき。橋あるまぐ紀所ふ橋をうき。その外いはふ草木などのたてるところ紀和ふうゑ紀。ゆゑくてよ紀和ふたまくなく。おなくて根のあくさまし。さうゑ紀筆のきぬなどつるかくえぐる紀ことと。大なるところ〳〵は上ふの法の中ふも此和むはあるなり。この家くのもかくることもみな法にありてかくゆゑふつるなりぐ。又から繪

ふ舟をかくふ斜ふかくことおちきもいくくとろし。大なる船のゆくことたなくめふえゆることもつゆふうなどもこの紀てたれわろきあり。なく免ふかけるとあのうへふあひくふうぐりとたええぐ。ちりにぐりてくつぐくむとまきなふえゆるなり。こはるふ法ふよろぐ。あぐまくとの地のまくふかくゆゑの失なり。又多虫をかくふこはうふ〳〵くたにうぐも。飛動くまきの動しなきがおろし。草木をかくふ葉も莖も地との際の筋をかくぐ。これ水とろし。是ますく際の筋を実ふなきなれぐ実ふよゑるなりゆゑふかくゆゑ。まぐかくてたにうぐやうふわりゑぐ。まべてよろ川の地。その実の地。何も和紀和が地ふ

て、何も彩き初て色なき地なるを、絵とし白紙が地ふして、何も
なれ初が白く、その白紙初へかくことなきまで、実の何もなき
空の地とハ異なれば、きハの節なきことハ、何らハ彩から絵とり
け節のなきハ此とれまつを、ちくざるれの、人の面をかくとき
から絵といへども、地との きその節をかくざるをいと、又から
絵ち、木の枝ざし、草花のかたぶち、葉の何も初など、法形きが
めくふて、くふまうせてかくゆゑふ、ゆゑとも、何りの形し、家の画も
みな法あれと、地ぶくて、やとも、何りよくて、形きことなの、
大うとれうなべての唐画のつくれの初なの、とうれども、唐
絵ち、鳥獸虫魚草木など、きべて此方の家の画とくぶれば、

甚くハしくこゝなふかくゆゑふ、上ものうきるハまことふ、真のその
地のごとくこれ初るを、此方ハ家この絵し、獸のものさ絵、鳥の羽
のさ絵、草木の花の志べ、花ふの何やなど、きべて何くくきるな
ふ、くくべてこれもむかくこれふけあきるくるり、地ふしこハ廣紙家
の屏風壁などの絵ハ、やくこれる地なるなふ、あまりこまふ
くハしくうきるハ絵なく、中くふよろしくうきるるとして、
さくやきるをよしとするなべれど、れこれふくもれ
唐画の方ぞ、まさりて、これる、大うこれ家とハ画と、唐絵と、
なぐひふえて、る和、得ぬ所ハ、勝劣をいひぐれるり
上件のめし、又ちがきこと、家の法ハもなづまぞ、唐絵ハ

うるおぼえもかくようぞ。くるぐおのがんもて。いづうとふまき。よ〳〵と
おぼゆるやうとろ紙とわてかくるぐびも多き。そのまぐハよきろ紙
えらひをろ紙をもて〳〵ちゆゑふ。いづれもいみし紀那人も
をさ〳〵えんぎぶなり。

漢ふみふ。もるせるるみぐりふ信ぶまぐ紀るる

世の学者。こもの紀ハ〳〵紀を。かう書ふもう〳〵えるりやせいぐ。
紀るるぶ。伝ぶるハいとをこちなり。まべて漢籍。うれるる。ひ
がこと。そうゑいや多〳〵。その言よ紀ふまぐひて。みぐりる
信ぶべきふ。あるぶ。

日食 月食

を紀るる〳〵れ聖人。日食月食のゆゑをぐふえもうもぐで。ぐさて
ひとし〳〵るもをうし。

世れ中の紀れるハ皆神の仕もるぐなる事

世の中のよろづの事をみれのやし〳〵紀を。れ奇〳〵妙なる神
のれもうぐなることをえをるぐて。巳がお〳〵はうりの理を
いてふをいとをるあり。いうう〳〵やももるれぬ事を理を以
てやかくいふを。かう人のくせあり。そのいふやところの理をいうさあ
ふもいへでいるる。抱ぞ。かもいふ〳〵のかく人のいれおきる理。後世
ういうりてひぐとなることの行〳〵ハをてる事。おやし〳〵まる
はひふ理のもうりぐる紀事ふ行へぐ。これを天といれてのぐ

る。みな神になるをもとゞ保ゆゑなり。

聖人をそるむる

世ゝを経ゝ人おゝなゞて。かの国の人〻として。他をそるゝ伝ぎる中ゆゑ。実ふそるゝもたんぎる人もなるべく。又ゝ経ふハいのふぞや思ふことなきども。聖人ふ多ゞしても世の人のそゝるてうきぬことあるふよりて。そるゝ伝ぎるかふして。世ふもるゞへるもありぎふゆゑなり。又も経ゝ世聖人ぎもの中ふれ子も。かの国の王ふなるゞ。もちろその道の人なるゞゆゑふなるゞ中ふ此人をもてことふそるゝ伝ぎめるゝ。これつゞめて古れをほめゝゝ。その道を強むとるるなり。

ト筮

を経ゝ。此国やても。ふと上代ふも。後世のごとく。筮ぜる。已ゞ神はうれ理をゆて。宮むるるもさゝもなるぶりしこぜ。ト筮とふ他あるをもて。ト筮を已ゞんふさぶめゞ。ゝるを。神ふこゝてその教をうをて。宮むるるぎなり。ト筮ふいづるも。神のをゝ〻ゆゑ。他ゆゑ。後世のごとく。已ゞ心をもて。他の理をはかりて。さゞむることも。大る周公旦とふさゝ人より。盛ふその風ふなるるなり。

華夷

を経ゝの国。後世の書ぜもをそれぞ。ゝれ国の内。大る南の方

さ。よろづの事まさる。北の方さそよりなく劣るさ法なめ。さら
るふ。中國とてほこりしさ。小れ方あて。南のうさ。夷といひて
いやしめあなりし地なり。うさを以ても。華夷といふうの。虚
して實なきぐ弘志るべし。

かゝる人の語。のしこくいひやれるこゝて
むしより世こふ。を以てうし人のいつる。名あうた語ゞうを
おもふふ。多ぐかしこく物ふ多やくをし。又多ぐふても。おのし
くいひとれるのこふこそあを。そのう後こ。学文もせぬは
祢のくもんかしこ弘さ。たうこみれ。あとよりよくいはるる
あて。さしをこそろふ及ぎぎめづしこ弘ろハなし。されど

よくいひやるるぶかしこさふげふさこそこ何をあ。みれ人
さ感ぎろなり。

論語

論語の雍也篇の朱注に。仲弓蓋未喻夫子可字之意云々
といつて。朱熹。つふ格物致知を教ふ。ちるふ仲弓さ孔丘が
言葉なるふ。いまゞ可の字の意をぶふ喻らぬさ。いそう致知
を得む。孔丘が言葉さう。かくのめくなるむあて。常人さい
うでうこをいはん。大うる朱学の牽強附會みれかくのめ。

まゝ

冉伯牛疾をやむ。孔丘のいはく。命矣夫。斯人也而有斯疾

也といへり。天命いとでたかくもがてともある。

又

論語に中ふも。堯舜禹泰伯文王をぞいみじくわのたまはれど
も。湯王武王を深くほめたまふ。一言もなし。意にあるべし。
後世ふ。湯王が言をにぎりたまふ。孔丘の意あふにあらず。

又

同書ふ子曰。孰謂微生高直。或乞醯焉。乞諸其鄰而與之。
とにあり。聖人の教の刻酷なることかくのごとし。これらハなべていと
ふかしてさしも不直といふべきなどのるふにあらず。なべて世
のをさへ不直といひてかぞへもるを。あはりのうへなり。又なほ

ひ此なるを。実ふ直ふもせよ。いとくらかる此一事ふよりて。
その人を不直なりと定めるもいとくにあらぬなり。まことに
人ふもにやもちろもなるにあるものなり。あしき人ふもとれる
もにあるものなる故。なべて一事の善悪ふよりて。その人のよしあし
を定めること。聖人の道のくせなり。

又

同書ふ。廐焚。子退朝。曰。傷人乎。不問馬。とも甚いとなり。まこと
て人の家の焚たるも。人をさきにやうるもあるべし。馬もよく
やくるものなりまして馬屋のやけんふハ。人をにやふもたとへなり。
るこそいとにやふもれ。さればぐ馬をこそ問ふなるけれ。こそ人

情なり。もとよりふまじき人をやとふをいとなりて、馬をとゝさるハいとゝ人なり。但し人をとゝかゝるゝ事もあれど記しもまぐれ紙、馬をとゝぬが何のよしとゝ行る。是まぐれの子どもの孔丘が常人ふこゝろなる事、紙人ふもゝ事もあるあまりふこゝろとて孔丘が不情をあゝ出り。不問馬の三字紙削りてよろし。

はやほ

時あゝて世ふ盛なるもの出ること紙。俗言ふはやるといふ。疫病のはやる醫師のはやるなど。よろづのはやると。事ともいゝて。この言中昔は書ふもなくて。抄出しおきたりそれを今時はやりいふとハいとゝ時なり。時ふあひて栄え結ひし時といふことなり。今醫師などのはやるといふハその産業の盛ふ用ひることをいふ紙。孔ハ多くその身の栄えをいゝるなり。

御北字

御の字北字。その國北王のすなゝでハいとゝ。臣下ふいゝることゝ。此字北ハ王のすをきていゝるゞ如し。皇國ふてハ。みといふふ此字紙ひてゝられど。御(ミ)ハ天皇ふかぎらぬ。おとよゝ下ゝふてもゝるゝて廣くいふ言なり。大御(オホミ)といふゞ。大なる天皇ふかぎりていゝる。神ふ申ハ。もゝて神ハ天皇とひ

かしく。御妻を后。御行を幸といふ類なり。されど大御(オホミ)といふ
をもろこしは御の字はつかひざれば近し。さて後には大御を
音便にておほんといひて。天皇にかぎらず広くいふことなり。又
それ後にまたそのおほんのほを省きて。おんといひ後には又んを
も省きて。おとのみいふ。今の俗には拙に出ても。御の字をおんと
いへども口語にはおとのみいへり。また。ましくにおみ幣。おき給。おき足な
どいふことをのぼるは。大御てふ古言の。なまじくにのこれるなりされど
こそなかりて余は。まさらぬるなりなれ。

人はうまれつきさはしくなるす

人は生まれつきさまざまあるものなり物の義理。事の利害など。

すべて筆とる事を。心にかへよく思ひて記すべきなり。口にはえいはぬ
ぬ人もあり。まづ口にはよくいへども。ふみにかけばかゝせぬ人を
なり。又口にはいへども。よくかゝぬ人もあり。又口にはえいへども。
文にはよくいでぬ人あり。又口にはえいはねども。文にはよく出
いづる人も有なり。

紙の用

紙の用。物をかくが上にいと多し。まづ拙をつゝむこと。拭ふことまた
器の具に張て害となる事。又かうよりかんでうよりといふ物
にして物を結ふことなど。あげられぬ外にも猶これにあげられて多
かるべし。されば紙を多くかくにのみ用ひずして。件の

すどもあるいとゝ不後ものぞ つりける かゝて宮ゐ内ゑ國こよ
王出る紙の内いゝ多くて厚きうすき強きやうゝ形るさ角ゞ
伺ぎもつゝぐさられど 拙かゝゑ安ゐ唐れ紙ゐ及身の紙
人たいろゞ拙ゞゆゝむもゝぞ 我ゑ ゐろ拙ゞゆるなり
古よりも後世ゝまさるる
古よりも後世の尚ゝ秩ること 美の物ゐも 事ゐも 在り 玉一つ紙
いをむゐいゐゝへた 橋をなゝび安紀 拙ゐて 絵でつる紙 近き
世ゐハ みうんといふ拙ありて 此みうんゐゝぶれど 楮ゑ 粉ゐもつゝ
ぎをおきれゝりその外かゝじ ゆゝ稱んぼ ゐゝ なゞれ ゐゞび
おおきゆゐ 蜜糊 で味ことゐ長ゞれて 中ゐも 橋ゐよゝ似てことゐ

くまされる拙なり 此一つ少ておゝはるべし 或ハ古ゐハなくて 今
ハ有る拙もおもくいゐゝへをわろくて 今のもよ紀ゝゞ多ゝ
世をもて拙ゝゞ 今より後も又いふゐつゝむ 今ゐ勝る拙おゝく
出まゞゝ 今れゝゐて思ゞ 古ハよろゞゐ事ゐゝゞ 内ゐる
おゝゝゝゝむ されゞその世ゝ さておゝゝゞゞゆゝ ありきん
今より後まゝ 拙の多くゝ紀がいでゝん世ゐて 今をも古ゝ思ゐ
屋ゝれど ゝれ人 事ゐゞ ハおゞゝゐゞめゝ
某ゝ家といふことゝ紀 某の亭とかくる
歌ゝ會ゐゞゐ 某ゝ家といふことゝ紀 近代ゝ必 某ゝ亭とかゝゝ
なれるゝいくゞ 古ゝゝ みゐ 某ゝ家ゝゝゝて 内れ 亭の字ハあ

多くぬきあやまれり。

名所

枕の國郡を論ずるに、ふる記歌によりて考へて、その國郡を定むべし。後世の歌は、ただ歌の新意によりまれる所をよむ故に、その國郡をば定めがたし。後世の歌は、さくに擬とせるに多くぞ。歌詠のうちなるぞ。後世の歌は、所にいうりてよめるも取ぐ記ことなり。いうにといふふる記歌枕を、中昔の書に某國にありて注せるは、いみじく誤せるなり。のく多記を、後の人、その語を注によりて、その國に平名所をつくりなすまへて、或は万葉にふよめる某山も、そなたなりなどいふあ

びおろき城、それも多を注れどその名のむろなるを、あるよアそのの所のめくちれる紙、他国の歌人、そこにいうりて、その名をきくてよめるなるべし。ぬきれどあり。

混本

古今集、真名序に、混本といふ歌の神を、ひきくれるを、思ふに、こゝにハ本に混ぜといふなるべし。旋頭歌の亦の名なるべし。別に此体にハあらじ。然るを古今は序にも、別の一体とんなりて、いくるか、又も長歌短歌といふ四字の対にせむ為めに、旋頭を旋頭混本とかけるか、いづれにてまれ別に此躰をなるまじくなん。後世書どもに、その歌とて載るにもあれども、そこに古

今集の序によりて、ことさらに造るまうけるもののごとしいふ
ものなりは、なほなり。その外に古より、混本躰やいふ歌とあるも
なし。

あやまり歌

あやまり歌、なほ、なほ、なほ、みなおなじくなる故、古今集の
序に、三つに分きたる中、ことびとかゝる中に六義とあるを、
むかしその名ひとつなるとまぎれて六義とつゝけ、歌にかゝることなり。
いみじきことなり。

又あやまり歌はやう

あやまり歌、古今集よりこゝろみるその歌を見てこゝにあやまり

意にかなふもの、やうにかよみたるものなり。然るに、萬葉集に
なるとその事にかなりて、そのかよみたる人を志
ほべかれど、後にその歌を見るのみにて、あやまりたる意を
まあるにハ、志ほどなれど、さ様ぞ今世の歌をやくに、大うた
にハおしてとるれども、あやまりにて、ふるひごとなり。
かしてとるべきなり。又萬葉の歌、その名をへたる草
木鳥虫のうへの詞とあるに、意のうへをいへる詞とを、ひとつに
てよめる多し。是又ろうえ物なくぞ。

さるはば

幸とふこと、此方は古書にも、多く福の意に用ひて、差別なし。

志うる歟字の義を異にして幸に福を受べき由なくして偶然
に得あるをいふをもて用ゐるもみな生意なり

教誡

を作りて古書をもて姦祇をのがれしめ
うるなり人を教ふるよりてよくなるものなれば教を
まいるものなハのをあはりてもちいまず免るのみ平くふ
姦曲詐偽のくまぐまをもてぐ周公且にまのあたりみ
く定めるゆゑに周の末の乱をおこせり戦國のころの人の邪
智ふかきをみて周公ぐをもへるをもり皇國は古書をハ春
ぐりをもをくぐあるをもて尽えぐ此けぢめをよく考ふべし教

誡の数なるをよおもうくんぬ多ハ愚なり

孟子

孟子曰不孝有三無後為大といへり徳なるをもて後にするが孝なり
ぐもて志るぐ〜をもて後あるが孝なるぐ身を富貴ふせむこと
大孝なるぐ先志をうるを儒者の富貴を恥ぐをもぐ多ぐおのが
身を潔くせむをもて親を思ハざるなりこれ又不孝なるべし

又

子産聽鄭國之政以其乘輿濟人於溱洧孟子曰惠而不知為
政歳十一月徒杠成十二月輿梁成民未病涉也君子平其政
行辟人可也焉得人人而濟之故為政者毎人而悅之日亦可

足矣。これ理窟なり。子産その渉ることを人を殺して、いまだ國中の民を殺さず。惻隱の心政をなすに多れり。これ齊宣王が牛を用ひたるをもて、是心足以王矣といへるごとく、不嗜殺人者能一之といへり。秦始皇の一ツふしなるもいうて。又程子曰。孟子性善養氣之論。皆前聖所未發といへり。性善養氣の論も前聖の意ふかくして。ほのぼのこれを發せん。又盡心篇に。孟子曰。不仁哉梁惠王乎。かぎり不仁を行ふ人に。王道をきはめんとをすれば。民為貴。社稷次之。君為輕といへり。甚だ云ふの悪言なり。かくて孟子終篇。多く親ふ孝なるべきものをもて。君ふ忠なるべきものを

もつてすること一つもなし。又孟子告齊宣王曰。君之視臣如手足則臣視君如腹心。君之視臣如犬馬。則臣視君如國人。君之視臣如土芥。則臣視君如寇讎。云々。此之謂寇讎。々々何服之有なぞいへり。此一章をもて。孟軻が大悪をさとるべし。これハ君ふ多くの人ふ教へらるる語とハいひながら。ほのぼのと口ふまかせらるる悪言なり。此書。人の臣たるものの不忠不義を教へらるるものなり。其國を去てその君をもとりなぞして。ろ形を寇讎とといそぐせむ。いとんらるもなき悪言なり。おそるべしおそるべし。

如是我聞

もろ〳〵の佛經のはゞ免ふ。如是我聞といへること。さゐ〳〵故あるものゝごとくいひなせれども。未この文ふうわいぶ。はゞ免ふかくいへるなり。いづれもひゞこと。つゝあきことなり。又我聞如是とそそいふべゝれ。言のつらでも。いとつゝあり。こもゝのこゝ。天竺國のなべてのなゝひふもいろべゝれど。なほ番譯者も拙〳〵。まべて漢学びする人のよをかりるふも。詩文を作るふも。和習〳〵と。つよふいふことなるを。佛書は文ふと。又天竺習の多のきなり。

道教ふまどゝるかゐの王どもの異さなる号

唐玄宗會昌投龍文。自称。羮道繼玄昭明。光弟子南嶽上真人。宋徽宗。群臣上尊號。爲玉京金闕七寶元臺紫微上宮靈寶至真玄宸明皇天道君。其上章青詞。自称奉行玉清神霄保仙元一六陽三五璇璣七九龍天元大法師都天教主云々〻〻屈万乘之称。従黄冠之號。不亦兒戯狂惑之甚哉と。

いとゝ。件の号どゝそた。道教ふ惑へる号なり。拙ことなり。聖武天皇は。沙弥勝滿と。御名告らせ給ひ。東大寺の大佛ふ對ひ奉りて。三寶の奴と詔へる類なり。

佛道

佛道ふ。はゞ悟と迷ひとをときまへて。その悟を得るのこふ〳〵て。その餘のよもみな枝葉のこなり。かゝてその悟といふ。はまさ無用の空論ふ〳〵て。家と世ふ益あるよなく。もろ〳〵世の人。

その枝葉の方便ふまでつるゝいのちる愚なる心ぞや。

世れ人まことれ道ふそくろはるざるゝ
もろ〳〵れ國ふも道教とゝふるの世ふ盛ふ行ハるゝて大ゝる佛道
とゝふ〳〵れだゝりれり此道老子を祖とハゝるれども老子ゞ意
やハいゝく異ふして多ゞこのやゝれ多ゝるるるざのやゝるこゝふてそれ
むゝをきいるゝれバやゝれきいるゝざゝるゝ皇國ふ此道のゝゝり
まゝうでこざるハ幸ひなゝり志ゝハ何れども天下の人のゝ佛道と儒
道とふことゞく奪ゝるゝるハ又なゝをゝれるれゝり大ゝる天
下れ人上中下さゝれ愚なるおゝなへて奥山の山賤(ヤマガツ)までも佛
を信ぜざるハ一人もなくその中ふ角(カド)ある字をもいさゝうよむほ

どのものハ又なゝバ儒意をまゞくへてよゝのゝを思ひ定めり。
されゞ神れまこゝの道を思ふ人ゝ千万人の中ふ一人二人ふて。
その餘ゝ神社ふつゝふる人の中ふまれ〳〵さゝぶ己ゞ家の業と思
ひれて神の道をゝるふもいれれとさる人ゝ多くハ佛意儒意なり又
神の道とゝふも皆儒佛ふよりて説(キ)まゞるる物なゝバまゝこの道ゝ大
ゝ絶ゝるゝるも同しゝるなり天下大ゝる伴のめくなれゞさゞ何ふも
何ふも佛寺のゝ栄ゝて社ゝれゝ衰へまゝてその衰へをうれ
ふる人もなく神ゝゞ病その外の祈ゝことふのゝ用ひゝゝ此
道もゞ世中の外の無用の物のごとくゞゞいふ〳〵より有来れる
るゝゝてひゝふるふ廢られぬとゝふのゝなり此道ゝれ天下を治

先國を治むる先務要道なることを志ある人ハ、これいまゞ夢
にも見きゝぬいとも〳〵あはれきすなるべし

宋の代　明の代

もろ〳〵の國宋の代ゆいりてたゞよろづのすり理窟三昧あり
て國政ゆつきても何ゆつけても無用の空論のみなり明の代の人
も又見識ひゝきて宋の理窟のわろきをあらため古より世々
の地もりの人の説の誤を人もつゞり〳〵ことなるゆえつけるる
人多きゆゑめづらしく記すなり さゆどつひゆまこゆとの道をゆ
もる人なり〳〵てそれ代なをぬるゆ神の御國ゆなりぬるゆゑなり

神獸神鷹

もろ〳〵今代清の代の乾隆四十二年とゆふゆゆれ國人のもる
せる西域聞見録とゆふ物ゆ氷山とて氷の山ゆりそこを人の往
来もることをもるせるとゆいもく道路亦無一定之所
有神獸一ツ非狼非狐每晨視其蹤之所往踐而循之必無差謬
有神鷹一ツ大如鵰色青白或有迷失路徑者輙聞鷹鳴尋聲
而往即歸正路件れこと諏訪の湖の狐の氷をわるるゆ又ゆれ
八尉鳥の道引のみちびゆいとゝよく似るり

鄂羅斯とゆふ國もる控噶爾とゆふ國

同書ゆいはく鄂羅斯北邊之大國也東界海南界中國西北隣
控噶爾東西距二萬餘里南北窄狹自千里至三千里不等称

其王曰汗自鄂羅斯之察罕汗歿無子國人立其女爲汗嗣後皆傳女迄今已七世矣仍襲其祖名号故國人猶稱爲察罕汗也其女主有所幸或期年或數月則殺之生女留兼統續謂其汗之嫡嗣也生男則以爲他人之種也云々これいまゆるムスコビヤなるべしもろもろふ右の下文ふいたく本控噶爾屬國稱臣納貢由來已久乾隆二十年察罕汗特其強大不復稱臣云々仍復稱臣云々其俗最重君臣之義如其汗雖無道之極亦無有敢議其是非者自古無叛逆篡奪之事一姓相傳不知幾千年視他國之朝夕易姓者相懸矣云々まさいたく控噶爾西北方回子最大之國地包鄂羅斯東西界之外云々などええらりこの

控噶爾とふ國まさにちムスコビヤのことなれば此ざるべし何とやら混雜の誤なるやうふきこゆ

天

かゝる人は何ふつきても天天といへり神ひとをもてざるなれむがことなり天も多く神のまします國ふこそ何も心も行ひも道も何もあるはなれば何ぞいまゆる天命天道などいふこそみな神のなすはふるふこそあれ又天地も萬物を生育するはもふも むがことなり其はの生育するもみな神の御もてざなり天地も多く神のこれを生育し給ふ場所のみなり天地のこれを生育するふもなれば何ぞかゝる人のこゝく天聖人ふ命じて暴を征伐

して、民を安ぜむといへども、おろかなる人、天はものをいはざれば、正しき道をもしらず、むがくもなき道とのみおもへり。世中の理をしらざる人多くして、その理を多くひらくことあれども、多く天の命なれば、せんなくてのみいひて、彼の天のむがくなるものをば、せめざるはいやをなり。天をひがごとしるなるべし。されば聖人の命じて、君を立てて、天下をやすくせしむるも、天のむがくをつたへしなり。

國を治むる人は学問

國を治むる人は、かくもしらざるべからず。宋学のみ、他どもはきれど、全くてそこなひなし。近き世の古文辞家の学問も、よくせばそこなひなし。いにしへのやまとをひきいづるなり。さて乱るる世多く、志だにくもりぬれば書もさしおきて、多く近昔の戦を記したる軍書とかいふものをつくりて、その世の人のよさのさかしこをおろかなるこころもちなどを、よくよく考へべし。

板坂卜齋物語

板坂卜齋といふものの、ふいたく、九月朔、慶長五年西丸御隠居曲輪に御出ゆ。石川日向守家成、今日も西ふさがり悪日にゆ。御合戦の儀首途（カドイデ）あれと申上げへば、西を治め少ふさげゆる。今日のきゆ系ゆと御意。夜晩神奈川、二日藤沢、三日小田原へ

とらつる也。これも関が原の内出陣のすがたなり。此ときに、板坂卜斎宗商
と云人、東照神祖君に仕奉りて、晩年御前に召されて、
ものがたりせし日記のやうに、もろもろ、卜斎が法名、今も
なを板坂卜斎とよびて、その記の原本、世にのこれり。

又

同書に、大御所様、小身なる侍なりつるに、こゝに昔
よりのものゝ、大こ三年、人一代、人こ三度、犬一代と申ハ、犬く
ときこゝろ、いとれ、三度もまつ殺しいへば、奉公もなり、傍輩
に笑ハれも、謂一代人倫のまじらひして通り申ハ、酒宴ぬき振舞
ぞ、殺し、むさくるしいへば、三年ハさて、無欲ぬきれ

いなる人やとほめられ、そもそもさて切、人馬も不持得、人の
物をかりて不返、出陣の供も成兼、一代世をかに犬畜生こいや
しめ殺、笑ハれを人こ三度、犬一代と申ハ、さく酒呑料理ぞ殺
し、武道をもて殺しハ、畜生犬畜生同然と申ものなり。

又

同書に、大法所様ハ、奢多なるを、深く嫌給ふ。天下を
取給ふ時も、出行の時ハ、十文字の槍、直槍只一本、長刀
一振、十こ、鷹狩も、十度に八度ハ、馬に乗給ハ、其外の肉へ、
を給ハ入ハ、遂こ、極寒こも、強て自身に取給ハ、

漢籍の説と皇國の古伝説との条々

漢ぶみ説に、まのあたり近き山を見るがごとく、皇國の上代の伝説は、十里廿里もかなたなりる遠き山を見るごとし。漢ぶみの説に、人情ふかひて、みなむとおもふなり。皇國の上代神代などの故事に、何の味もなく、多く淺ちかふ、ゆゆるはれ人の思ひたうる智の及ぶかぎりこそ、たるふ遠きゆゑ、その理のゆえなどなく、淺ちかふゆゆるなめ。それらのとりたる山に、ゆゆるほのうふ山と見ゆるのみにて、その景色も何も見えぬどころなきがめしこそ景色なれふなり。人の目力の及ばぬ故なり。又漢ぶみの理ふくむふゆゆるに、人のいつる説にて、人の情ふ近きなり。皇國の近き山に、きゝ知よりて見えをうれて、物のしられ見ふるめし。

饌

饌をつくりとのふるを、俗ふ料理といひ、それよりつくりてそのつくりやくのへる饌をさしても、料理といひ、法料理をひさる店構おる料理などいふ。みな饌をいへり。

又

つの饌に美味一つ菜二ツあて止へし。吉なく数多けれバこれ凶ふまぎれて美きものもたちなるねださしもめでくおぼえぬ。仍て他の食饌に数なくてハさうくしく見こちたなる事多きも、中くめでくかくだおぼゆ。数おなくつゆりて淡くハうる

さくなりてさくなるあり。多くは義を品をかへて。数おかきもよろ
しさて昔をまねべて。ものをめとしをしを。近き世ふハ始の一つを。汁と
いひ。次ふ出まを。二の汁といひ。ひてその餘をハ。汁とハいをず。吸物を
いをて。をるをまひ物とハ。別なるめし。又いそゆる菜をぞ。昔ハ物を
せをとこり。清少納ゑ枕冊ふなどふ見ゆ。又伊勢神宮の書ふ。まハ
をとなるを。伊勢れ言ゑ。此函の今も山里人など。海をとふ所なり。

伊勢國

伊勢れ函ハ。かゝ函のうゑ函ふ古語ふもいひて。北のをてより南
のをてまで。西の方を山をつゝ。ゆりづれて。まことふ青垣をなのせり。
東の方を入海をていせれ海とふこれなり。かゝていづこも〳〵山を

海との間。ひろく平ふ。北を桑名より南を山田まで。廿里
あまりがわど。山といふ物一つもこゆることなく。ひをづれの国ふな
ほ。その間ふ。廣ゑ里くおわくる中ふ。山田。安濃津。松阪。桑名ふど。
ことふ多きつゝ大きなる里なり。大をき京より江戸まで。七国八国
を隔てゆく宮ふ。うだりれ大里を。近江の大津を。駿河の府をお
きてハ。ことなし。外の函をも。ほひやをる。狂伴の里をふつぎて。
四日市。白子などよゑれ邑なり。かくて此國。海の物。山野の物。をべて
少もしををぞ。暑さ寒さも。他國ふてをぶるふ。さしも甚しをを
ぞ。但しさむさハ北の方へよるまくふ次第ふ。をし。風ハよく
ふく函なり。國のふぎくしゑ。ことハ。大御神の宮ふまをづる旅

人あゆることなく、ことふ春芽は強たいとく、ふぎてくしたるす。
大ろ天下ふなくびなり。土こえて稲いとよく、あなつ畑も畑つ畑
も、大ろ生るよく。かくて松坂むことふよ紀里あて、里のひろきる
も、山田ふつぎくれど、富る家あるく、江戸ふ店といふ畑をかまへ
おきて、手代といふ畑をおくつかせて、あき船ひせさせて、つる
じた國ふのみ居て、ひそびをりうひべさくもつかで、うちく
ハらくゆくうふおごりてあるる。まべて此里、町まちゆゑを正し
くうぞ。家なみとろく、一つごとふ一尺二尺で出のてひとく
かくぞいとくまどきれ。家居もさくもいかくうぞ。され
ど内これまましたいとよく。水もよ紀和とろ紀和をつかてひ

やくくぞ。川水ちくなく潮もさく深い船かよいぐ。山へハ大方
一里ひのり。海へも半里ひのり。諸国のあよりよく。ことふ京江戸
大坂もをよりよく。諸国の人の入る國なれど、いづとる
をよりよく。人のんをよくもひくぞ。おごりて法をもくなく。人
のくちち男も女もねゆびくることさくふなくよろく。女も里も
ゆくうふぎくくくまくふをぐさよそひよく。まべてをさく
京ふおとれることなく。人の物いひさ尾張のゆより東の国ミハ形
まり地ねき紙。伊勢ち大ろ形まりなく。されど山城大和な
どくハ。伊とをくまいやくく。詞もいやくく紀ことを多く。いとある呉
服地。小間物のとぐし。松坂もよ紀品を用ひて。山田津などくを

こよなく代物よし。されど商人の京より志いるゝも。松坂ハことあり
物よく上される品なり。京のあき人つねに来かよふなり。時されバや
見物も。をりをさハ。諸藝も許うなにたせてハ。よろこともならバ。
もろ〳〵の細工いと上手なり。あきなひごとにぎはゝし。芝居。見せ物。
神社。佛閣まべてにぎはゝし。すべて此国も。他国の人おほく入こむ
国なる故によからぬ物もおほく。盗なども多し。松坂も。魚類野
菜などすべてゆたかなり。されど魚にも。鯉鮒すくなく。野菜に
も。くわゐ蓮根などすくなし。松坂の商ねるすも町筋の正しから
ざるをたしけなきと船のかよハぬとなり。
米粒を佛法ほさつなどいひならへる

穀物をおろそかにせまじきよしをいふ時に。米粒などを。佛法(ブツホフ)
といひ。東國にてハ。菩薩といふ。これ大切にしておろそかにせま
じきよしなれど。然に心をいとなうげきれども。佛菩薩より
ぞうきものとしんじたるんより大いふなれど。言ハいとひがこと
なり。神とこそいふべけれ。またとに穀をうつもなきそうきものなれ
ど。神とも神と申まべきものなり。
世の人ハこざかしきことゝいふをよしとする
世の中にこざかしき人をいましむる道歌のさかなる俗家をよみて。
きゝるをすゞしきすをよくいふものなり。或ハ身こそやにまれ
などいひて。まなんのさとりにて身のやすきよしをよむこと。みな

儒佛ふ至つ〳〵ひろる俗ごとなり。まことそこそ。ゐど身を安しと
して足るを志れるものそなきものなり。くみとくだ人の齢なぶも。
七十ふ及ぶハ。まことふまれなるうなるだ。七十までも生ちへて
ハ。はやく足きりと思ふべきことなるども。人みな死なれりと
い思ふぞ。末のみじうなるをのゝ欲きて。九十までも百歳までも
生(イカ)まほしく思ふぞ。はこれ情なるなる。

假字

皇國ハ言を。古書どもふ。漢文さるふうけるハ。假字とふもの
なくて。せむうさなく止るをなる故なり。今ハかなふとい
ふ地ありて。自由ふくるふ。それをなくふ自由なる漢文を

ふて。ふくむやうするも。いとなる所ごとそうえ也。

かゝる國ハ詞つゝしび

皇國の言語ふくゝぶれだ。唐の言語をいとなゝきはなり。ゐも
へだ。平言といふこと。皇国言をてハ。まれふいふとつふと。ふことま
もなりといふと。ふだ異なり。まれふいふハ。言(イフ)とふこと主となり
て。平なゞくもふことれなるとなりいふことまれなりハ。平といふ
こと主となりて。いふこふとのはもなる所。他の言も比ゐゞ多し。
をべてれことみれかくのめし。

佛經ハ文

をべて佛經ハ。文のいとつるなるものなり。一つふ短くいひとるる

るを。ぐ〳〵しく同じことなれ共。ことゝいふなど。天竺國の和い
ひなれども。何ぞ。ものゝ。いとわづらはしう。ものさはがしき。

神の恵くみ

上は位ゐあく。一國一郡をもちて。多くの人を。ちゐ。世の
人ふうやまひ。尊ぶ。ものゝくてもぐ。下もうゐぶ
食ひ。さむうまき。やしく家る。これ〳〵みな。君の恵ぐみ。先祖
のめぐみ。父母の恵ぐみなることハさるものゆゑ。その本をゐづ
ぬきで。件のるどもとはじめ。世ふなりとなるもろ〳〵れこそ。
みな神のみ〳〵ふあ〳〵だといふこと。ものゝ。ものれば。世ふなるむ人。
神をゐるまでハえあるぬるなる。平日ふなりぬることも。

さ〳〵母ふ。ふやめぐ。忘れをるなゝひふて。君の恵ぐ。先祖の
恵ぐ。ものもさ〳〵も。ものゝ。もとより神のゐゐはなることは。
みなおぼれて。思ひもやらぬ。いと〳〵かゝることなるまぐき
ものゝ。一日も。食物なくて。いふせむ。衣物なくて。いふせむ。
これを思ひ。君のめぐみ。先祖父母のめぐみをつゆふとするべき
ふなのゝぐ。ものゝを世の人。さることをもちぐ。ものゝ。神をぐ
ゐぐよりて。ぎふ思ひ。ありて。くゐる〳〵さ〳〵なるゝて。祈る。事なと
かなゝひバ。その神をうゝみ。ものゝ。なるハいと〳〵かゝぐけ
なきことゝ。ものゝ。生をいづるより。死ぬるまで。神の恵の中ふ。居ぬ
ぐゝ。いさゝうんふうゝ。ハぬるものゝ。ありとても。これをうゝみ。ものゝ。

きこゝろに、又祈ることゝきく。されども、神はそなたにやゝなきものゝごとく思ひなどするなり。いふぞやうくをもの、ことゝく神はみな、なることを知り、平日(つね)おもふてそなたおのづから神のなかとなでハうおもなるを知ゞ。あとゝ百両の金ほしき時ふ人の九十九あるゝて、一あるゝざるゝぬ。その時ふ人をゝ恨ぶべきゝ。恨むべきゝ祈ることかなへなゞとして、神をゝうおきねふうらみなるゝ。九十九両なるゝ人をゝうなれのふ思ひてうらもるゝごとし。九十九あるのめぐみを忘れて、今一両あるゝざる我恨むるといふ。

道

神の道ゝ世ふをゝ行ふる為ことゝ道なりみな人をゝうおもなる

皇國の道なるふ、ものゝふ系筋だり世ふのことりて、あゞ万こゝなるゝぬ。他の國の道ゝのゝはびこりふはびこりるといふるゝこゝり。為ゞ新ひの神のたゝりゝ、きべなるねなるけて。

板元

名古屋本町通七丁目

永樂屋東四郎

わのおほち氏もれせられるるるをかはきは
はるかきほぞをのわをまれたる書は中ホ
人ぞまれるふしくなぞ知ふうはくし
ぞ絶ら絶けるぞもいるもちふるるるし
はもを屋きなるねを云ちををぞしてて
又なるふるれのるヨホふれてえもしきてる
志為海の井ホぞあるはこのるを志のふふ

さいかくさいそなふとこそやまめ
しねやまま心ゝのけて思ひよられる
ゆちを又多くなふやあきまそろさい
ぬもくかくこのねは先ておなしふい
しあ志のふ人れよみ見むるを田ては
れ々ゝ所ゝあけを初ゝ菜ゝを思ひふれ
ゝてはみ所のら清ゝ出おのれけるをは

てれ巻清ゝ椿ふなめて十五のひらよ
をかきゝていまゝ下ゝのまゝふてあ
めるを翁うせられてちちうゝ清き
て十回巻ゝ志ゝ原ふゝれ書の巻ゝれ
をゝ出清ゝてゝ巻ゝかゝゝ志ゝ原ねね
みむ人のゝめよくのらむはまふゝてゝ又
一巻ゝをすゝぬはゝ先の三巻ハ寛政ゝ

身をもまた紀たるをとをしたきくこそ
三巻にて板にちらせて世度にて五百ひ
あはせて十五まき紀ふそたのれ是けるる文化
八年十二月八日　本居萬麻呂

玉後間後書

玉後間後書は加藤蒼茫翁の著述にて
大人の此玉の巻にはかの蒼茫翁
のてわざにかきを出給へる由ふみにも
よりて物の注釈にのやうに考へたる所多
有なれども　如何ぞ更にこゝろ古事記の傳を
はじめ先の考の書ぶりにもなほ猶ふかぶかと
ひやりにまに　にまりて考へる何ぞかき第
ぶきにみにまに有けり　法志のはあまぶ世の

若狭の業にぶさみの角ぶりはいのこざらま
けを萬ふいるわふき人の志わざふてをはら
皇神の恵ひ影学ひの筋りも公ぶ一入
立志人ぶ昭之給をてあらして世のうひ為法
信くからやて昭世こ今世さまぐぶぬき
うさを引出てをまでのう事ふ考ふ為ふ世
きての世給へ前ふ考ぶ事法を一事ふ世乃
おをぶくふ為事ふ出けるよもやぶ拾ぶ為やや

遠き國くよ事志角ひ来て行事ぶをの為ひ
昭ふ志為人ぶ拾ぶ為ふ昭の中ふ免考ふし
おふ一世ぶ世ぶ免給へ法ふ世為きを毎乃へて
考為ふ世ぶ事ふ給為ふ為る世玉ふ考ふ為法信て
道為ふ給るを一へぶ世はぶ事ふ
給ふふ為ふ世ふ法為ひぶ世毎又ふ給世の
何ふ事ふの拾ふ為ふ事毎ふまぐゆ為ふ為ふ
ふてげふふ給ふは世事ひふ為ふ世為ふ信ふふ

ぶもおろかにはあらぬ此弟子こゝに懇ねんごろに書く
ろはぶんのをぶ此ことを給まるは今毋ゐ書うら物うあり
給ふやうにて世等をてうえし見添あびゆ有信
ゆのうみ大人の添許ふさぶてひきうせ張ふ
ら此毋こともしてゆるくうまてうあむこまてうゆし
いさてこの書はへてさまぶ志ものがきゆ沢

文化九年正月　尾張　植松有信

参考熱田大神縁起　一冊

尾張國熱田神宮ハ三種神器の其一草薙宝剣を納奉り
正殿中央小日本武尊と称し天照大御神其餘三神を合
まつりて延喜式神名帳小名神大社とせらる實に伊勢
小並びて千古不易の貴き神宮なり抑武尊の天下の大
功と立さま支申も愚なり智勇兼備の神徳万世小溢
きをり世と治る人うやまひ恭つるハでハ叶ぬ大
神小ましまを抑此縁起ハ貞観十六年神宮の別當尾張
連清稱古記古老の語傳とを稿有しを尾張守藤原
村椙添削ありて落成し一通と公家に奉り一通と社家
小贈て一通と國衙ふ留めらるとき小寛平二年十月十
五日なり當時儒佛の盛なりしにさる説もましらび
古傳純粹の縁起小ふしてよろこび貴むべき書なれども
を〻轉写して誤脱少らぬを熱田の医師伊藤主計
信民諸本と以て其男子訓次と共に校讐し参考注解懇切
なるを所あるより後秦門先生補修し
て上木せらる但し此縁起ハ武尊西征の支を記きじれ

で古事記日本紀より抄して巻末に補記されもとより神階の次第摂社末社等の支ハ附録ふ載さるべ此縁起一冊ざふ見る則ハ熱田大神の霊蹟ふれいてハなかつらなきをいろる為めなりぞ○文化八年夏秦門先生序明和六年三月作者自序ありし

直毘霊

一冊

此篇ハ道といふ支の論しと注ぜられて先皇大御國ハ天照大御神の御生ませる大御國しといふ支もしまりあらぬ貴き神の御國をれしし万國とハ云としるみふあもあらぬ儒佛の教ハ渡参て後皇國のとゆめし神道とりふ名も来て神道と名つけられし支漢古の大御手振とやまてまて世の害になりける中支ゆ支ゆと論じて学のひろこてて世の害になりけるゆ支ゆと論じてが神道ハ天皇の大命とかしこみうつるしみの御蔭ふ神をまつるやぞ〳〵あるべきこくれてふの〳〵裾神をまつるやぞ〳〵あるべきかぎりのそざをしてふどひしくたのしく世とてなるの外なくもひて道ともむるらハきれるきからぶ

み心を被ひ清めてそぐ〳〵しき御國ぎろもて古典をよく学びてよをもクせを受行べき道ゆき支ふ自然ふ至てん其をもるを行なるなて神の道をりけなとなふふをあてけりとれふをとちぞとし世人の道をりちぐへたるを禍津日の神のみとぞとし世人の道をりちぐりてこのまがを直きみをもざゆもバ直毘神の御霊さられけるしたの議論ハ古学の弟一義なれが闇誦のせらゆいまでもよみゆら書ふとそ明和八年十月九日ふかきをへらしつときに齢四十二歳ろりも

と古事記傳一の巻の附録るるを求むる人の便宜をれ

り い 戦行の小冊ふもふてたり

萬我能比禮

一冊

古来神道を称者佛道をハ排斥をど漢学を議せしもの

をなしたの侮ふ本居翁をじめて古典をよく讀明らめ

古人未發の見解と立聖人の非をあげられつきバ誰も

〳〵驚きいぶかしこ信ぜざりしもきは支し就中此医

戸呂憤ふ堪ぎりけるふや直毘霊ふ論じらもたる條々を所々あげ口ふまうせて論じかへし古事記書紀をもこれらをと議したるふが却て禍津日の神の狂業ぞとてそれを攘ふ料の書なり○書名の意ふ直毘霊といふて根の堅洲國なる浪振比礼滝切比礼の類として禍の比礼とハ弱たるべし

葛花

二冊

さて医戸呂万我能比礼と著し翁の聖人をいとく悪ましをしを怒りみだれに直毘霊と悪口せし無誓の説ども本文を抜出次とたゞうもえ見過しかゝ祓を遊てこまゝふことゝり難ぜらもたる物ふ比論らをたるとなどいとおもしろきが多くいよ貴きこと漢土の教の宜しからぬ支明白ふ知られたり附録に産毘神の支母兄弟婚合の支佛道ふさしおき專漢学を悪ま尚ゝ支異の問答とのせらる○葛花とハ天

の下の学者千有餘年漢籍の教ふまどひたるを毒酒に醉乱たるふ為やへをもが醒と醒さん為嘗よと摘来たるよしふて名付られる書名を本草ふ葛花甘平酒毒を消し腸風下血を治とあり東垣も解醒湯ふ用かるといつり○明和八年より十年をへて安永九年霜月廿二日の夜出来○門人市岡猛彦上木ふたる時の跋ふり

麻須美能鏡

二冊

古学の道年月ふ威に行も今や儒佛ふかつら徒も内外尊卑の差別をえて本居翁の学徳を仰ぎうべるふ世の中にをるを直毘霊葛花ふと著されてより四五十年も星霜を経て枉言ひ出るものをさくらぎりけるを上野人沼田某彼方我能比礼のあへなく説破もつるハ其論の拙かりし故ぞとてまさありぞ四ふ級長戸の風と口ふまうせて罵り旧事本紀を崇信じ天之御中主命を推立聖人と神のごく敬尊し又一家の学を立んとそこ

こゝ信濃國上田の小林文康彼書の誣説の多きをその
まゝおうバ初学れ輩の惑ともなりて此書をあ
らもしその僻説をとゝ漢学の道の教ざゐのあしきをも
心れうちゝ照しみよとして磨なす真澄の鏡照し見バ
漢の心の闇ハ明らんやいと哥をよみやゞて書名ゝも
とてさるなり○直毘霊葛花其餘の書ゝも故翁未いと
もぎりし説とも書出古学者ゝ益多き書ゝ○本居先生
孫有郷主序尾張儒官鈴木翁序天保五年二月伊勢山本
吉正上木の跋あり

花能志賀良美　一冊

是ゝ級長戸風を論斥たれ書ゝて下総國勝鹿小松川
あゐゐれる菅原定理の著述ゐて麻須美能鏡し並見る
ゝ畢竟ハ同じゝのゐら其躰裁悉異ゐり彼ゝあるき
ゝ此に精く更ゝ弥しきいひゐしもあて初学ゝも心得
易きと故とゝされを全文約ゝして俗談平話ゝまゝへ
をかしみゝあり序わくゝの心得をもさとし彼書ゝて

ゝをもを錯て假字づゝひとたゞ一しをもゝとゝりを
べて取遊き詞ゝてけゞりたて真澄鏡をよゝん人ゝ必
ゝさ此花のゝがら みをよゐるゐし○書名ハ本居翁を
櫻根大人と謚せるゝつきてさる悪風の為に花をゝら
さじゝてゝがらみたるよしの名ゐるべし○一名を妙
ふて出しゝゝ戯よべてゝさを級長戸風の風氣をゝけざ
らゝめんとてゝとみづゝらい○天保九年四月自
序ゐて

詞玉合鏡　折本　二枚

岩雲花香柳澤信郷とゝゝゝ著ゝ○活語の定格変格に
先達の考漏されゐるゝを補ひ活用の例と詞数いと多く
出し心得易のゝべく図ゝあらゝし細ゝ創さゝしたり
てゝゝをは紐鏡詞八衢詞遣友鏡等ゝ照合せゝしてハ叶
ゝゐ指南書ゝて語学家有益のゝめゐて

天祖都城辨々

一冊

ある人忌部濵成の撰とせる偽書神別本紀とゝ物ゝ天照大御神の都ハ豊前國の中津なりとて謂るを破りて天祖都城辨ゝ書一巻とゝらせしてかの大御神の都ハ大倭國なりとしてそれよりしるを本居先生此辨々を著して此大御神の都ハ高天原にあるよし諸の古書を引て論辨せられあるゝ尤本書に漢文も残さび出さるゝが別ふゝ中免見るゝ及ばこれハ寛政八年ゝ上木してをもより既ゝ著されゝとなり

地名字音轉用例

一冊

古ハ國名又郡郷名文字ゝらゝ正字ゝよれ借字ゝかまきあれべきまゝ定めを書たりしを和銅六年五月詔ありて畿内七道諸國郡郷名好字を著ゝ令ありゝ延喜の民部式ゝ凡諸國部内郡里等の名

並二字を用必好字とともと有て後ゝ悉よき文字に書へ二字ゝ約されバ字音と借たるゝもさ四の字音ととたるさ四のあやし轉用り漢学者ゝどゝ此ゝ信濃ハシノウとよびつらんをさゝ相模ハサウモ後ゝ訛るしとやうにさへおもゝさゝ考ゝるのゝ後ゝ訛るしとやうにさへおもゝあらんゝとて凡和名抄ゝ出れる國郡郷の名の訓注あるかぎりと出し或ハウの音とカの音ゝ轉用ひ或ハンの音をマの音ゝ轉し又をアカサタナハマヤラの行の音同行通用せる例其餘雑の例を分てこゝ注しをめされそり此書とゝくゝみ考へて古人の文字遣の自由なるとも又猥ならぎゝとも知べし○寛政十二年刺成

手枕

一冊

源氏物語ゝ光君六條御息所ゝ通初ゝひしてじ先のさゝとバてざと畧して本居翁さゝよしを知らもぎゝゝふをあらねどかの物語のふてをまねび試んして三十三四歳れころ紅顔の巻

のはじめを補ふやうふ
筆づうひふもれとるま
く手本ふハ究竟のまじく自在なるものふて文章か
の手枕ふぬぎりうを免る春の夜の月といふる哥あ
ふより手枕と名づけられたるなり

紫式部の

冠位通考　一冊

こと位階の沿革を古今通もし考たる書ふして先達の
いまだ心をとめざるし支をいと明らふ論定せられて
其功少からぞ上代ハ其家よつきての尊卑ありて冠位
轉昇なうなし支ふもじまを推古天皇十一年をじめて
十二階の冠位をおられし支孝徳天皇大化三年七色十
三階の冠を製せられ同五年二月冠十九階ふ改らもし
支天智天皇三年二月廿六階ふなり天武天皇十四年正
月より爵位の号と改め位記を賜冠の差別なくなりし
支持統天皇七年朝服の色を定られし支文武天皇大宝
元年の令ふ親王四階自餘三十階と定られて万代不易

の典としられる支とかき
支親王の位階僧綱の支
神階位田の支までを例のもや
なる筆ふてきをしくかきつられたる考ふ
有職学に志ある人も必見るべき書なり○奥書ふ云
文化二年七月廿三日注違なりんか重ふて比校
明述をあり

獵官位の支勲位の

やをかべ日記　一冊

阿波國人岩雲花香ハ古
者なり天保二年六月伊
その子利貞とその家な
し時の紀行なり十五日
その日数をとまて八日
十一首の中廿八日花香
翁培山の富士山の画あ
主人片野善長上示せし

躰ハ語学に出精の学
豆國高田郡多田泰明の家より
る只年やとまに富士山ふ登り
ふ出立て廿二日ふかへまたる
日記とるづけつるよしふ哥数三
首ハ利貞のふ○巻首ふ精々
三首次ふ自序まさ此永樂屋前の
由の跋あり最風雅なる躰裁ふ

消息案文

一冊

おもハ萍居黒澤翁満著し○手紙の文と昔ハ消息といふ類ハ尊卑の辨。文言葉遣ひ雅言俗語の相當とをとき百年始暑寒の消息作例雅俗並い

。調度の名の釋　を文に惣論の拾遺あり

天保四年三月門人松本安樹序同竹之下直蔭跋あり

繪入新板伊勢物語

合本一冊

伊勢物語の素本世小類多しとハいへども魯魚の誤をも訂さて上木せるもの多しのみなるを是を長禄二年の奥書ある寛文二年の版と得て文字の誤脱と類本小て校合し新刻しつゝ素本中の最上といふべし

徒然草

新板繪入二冊

徒然草二百四十六段諸本小脱落ありと此本を或名家の本もて上本しさはらやまとも和く文字もふとくたしかよて少人にもよみ易く傍れ假字も悉つけてつゝ草素本ハ出れ上こそものあるべかゝ

後撰集新抄

後撰集廿卷ハ天暦五年坂上望城源順紀時文大中臣能宣清原元輔等に詔あるて昭陽舎ふて万葉集を讀解せさせ給ふ次ハ一条摂政（謙徳公）藏人の少將たるとき和哥所の別當をかうむり云云と袋草紙ふ云るせり○哥員ハ八雲御抄拾芥抄ともに千四百廿首今本ふを千四百廿六首但重復六首あり○本居大平翁此新抄の序ふいとく後撰集ハ古のみさうるふりし代（上村天皇御時）の哥どもにて哥学の道ふとりてハよく明めずてをえいるまじき集ふふむ（中略）うくて此集と論ふ古今集ハ大うた哥に屬まじらぞ撰やくへられて万足ひたるを此集を其ぶ表裏ふて四季恋雑等分たゆふも思ひの外なるが至に入て話ふ都ていやく大らうるは撰ふて當時家々の集ままも何ふまも見るふ隨ひきくに從ひ采集て其哥の好ぶとをもいしば只集めふいうつめたるものと見ゆるが物学びの方ふとをてハとれもいとうもしき軒にる（中略）ことが註釋としてハ為家

の大納言ふ抄と季吟法師の八代集の抄さて契沖阿闍梨の聊ば書加へたるのみふていづを懇ふ解さやし多る物ふハあらぞ（中略）におのが門人中山義石を三河ふ國吉田殿ふ仕へて萬はめ人ふるが先つ頃其君より罷き俳夏と内ふながらうけうてこもが注解とふひものそれ云云○此集ふ学者の專要ふる夏上ふいとれたるがどもにくろひれなき引ふ風ふ題詠なくすべて由緒ふる哥ふるをを詞書ををしめて意得がたき夏のふおるを義石ふ上ふもくをしく考友ふかさら深く考ひ師ふ質問し精しきが先達の說當時ふ人の新說ともあるふ限ふ並べ出してかく明細ふ注釋ハ古今比類ふし猶後ふ發明せふハ追考ふのせ別記ふ出し集中作者の系傳官位等の次第を委曲巻末ふ挙ふり

○一ふ三春　○四夏　○五六七秋　○九ふ十四恋

別記一冊　雑以下并追考　嗣則

新古今和歌集新鈔　四巻六本

外題よハ新古今和哥撰抄と有巻尾よハ新古今集註と
あり　新古今集ハ土御門の院天皇の元久二年三月廿六
日後鳥羽の院天皇の院宣ふり参議右衛門の督通具卿大
蔵卿有家卿右近の中将定家朝臣前上総の介家隆朝臣右少
将雅経朝臣等の撰進なり此鈔の序ハ定家卿ハ父俊
成卿の喪ゆへ出ず家隆朝臣ハ父ひし折うらふて心にまかせぬ品
かとしはもとよりしかきて此撰ふ心ふ適をぬけるれど又
そも〳〵二十一代のわうの巻々玉をくだき金をきろ
れ其聲傳ふ世を今やかどへり中にも時のえらい人
の心ハ色と見せ言葉の露のひしもをびやさしをさま
を此集にこを侍れ此ゆゑやゑ宗祇法師も草菴の座右
と名付て秘蔵せらきしとふるき人の申されしなど書
ていよ〳〵むろしも此集の哥とよろこび愛ざるもはみ
しさて此新鈔ハ後花園院の天皇の御代ふ哥学者の名高
く詠哥もよのつ祢なならぬ下野の守平の常縁の作ゑて先達
の説とこひ少〻引簡と加へかきれくよし奥書ふあり

ちかはふ猶もをたる哥多かてけるバ玄旨法印年来聞
かられけるを義ふよて惠雲院殿近衛太閤三条西内府等の
御説をも述て増補あるよし慶長二年の奥書に見ゆ猶
今の本ふて巻首に序文をのせ歌に斉名の羊猶考ふべしを載
次ふ此一部の作者の略系図巻毎ふ出る哥員をも載さ
り古学いさゞ初らけさはなきの鈔物なれどさすがふ
近世の哥仙たる人の法解にてをの哥れ本哥よみ入ら
もとる和漢の故実れどとも悉らけられにもで美濃れ
家裏ゑどよむときふまづ一わさて讀までをえあるヨ
しき書れり元江戸日本橋万屋傳兵衛の板ゑりけるを
購得て板木の磨滅かけ損じれるを悉直して善本とし

新古今集美濃の家裏　五冊

新古今集とえられけるゑろえ哥道盛ふ行てを名人
上手雲の如く起て其風體も様々ふきども其辞花々し
く其調艶やかし或ハ調子を痛をらんとて手ふ遠波の
奇なるとも詠出或ハ磊落と好のみて常格ふ錯もあてと

もふ英雄の所為るもで温和ふやそらりはハるく哥意も玄幽ふして悉秀逸るれど打聞て感ふ堪るぶら又味へハ容易く解し得るもくれし古今集等れ如く遠

鏡の俗語もて諺解もるしがさき集るり東野州の四巻抄加藤盤齋れ増抄あれど初学の為ふハ事せまく又迂遠抄

遠り此書ハ校集二十巻千九百八十餘首すべての注釈ハあら祢ど議論ある哥のかきり六百餘首を抄録釈ふ例のよにまめやうれる見解をもちて一首ごとふ義

もし刺もし又詞れかいりいひまそしてふをはの用ひ

さまるど詞ごかきたばえまでさ田で談明

かとハ思ひもつらざるし所も驚あきるしでるて

せらるし支妙からび近調れ哥人よみ味ときハ人のも

よく難へられ已の自然功者ふるらるし益いと多か

らむさてこの書ハ巻首ふ大矢の重門が物学に大垣より

来居て何くれとの中に此集れ哥ども

の心ゑへとなむをとひけるをまやうふとひたづ祢あるにさ

としあげつらひたるじくそ國ふかへらむ家

づとふ書ものるしたて趣とれるじくそ國ふかへらむ家

書てえさせよとおへるもく書て与ふ

十一

ことは寛政三年四月の支ふく翁六十二歳の時なて

加藤磯足大矢重門及秦門漢文の序あり寛政七年刻

美濃の家墨折添　三冊

是も重門にわさへらもたる書ふして今附録ゆして合

妙も　家づとふ残もる花もとそへりかるじ山路れ

末とづ祢て巻首ふ出して上巻ハ新勅撰集。續後

撰集。中巻ハ續古今集。續拾遺。新後撰。玉葉。續千載。下巻ハ

風雅集。新千載。新拾遺。新後拾遺。新續古今。まと古きふか

へてて千載集こもらの勅撰よてれもふよしらる哥少

しづ抜出し校篇のどく褒もし難しもちさてまさ哥

意とも釋せり契沖法師の難勅撰の説とも又難ぜり其

中に哥のこわげて評も注るきあて後ふ書加へんと

てたうあしおられたるべふしみどてに有捨ゆきに

もあらねど其まして上木せるく

尾張廻家苞

此ハ新古今集美濃の家褄れ説と挙て殊か微細に褒貶し自己の新説とも多く出して本集れ哥と釋せ又美濃れ家褄より哥員も多し正明ハ俗稱喜左衛門尾張國神守村の人なり初鈴屋翁に随ひ後江戸か出て槁校保己一の門ふ入る博覧卓見豪爽洒落の学者し故小其論をる呼も鈴屋翁の如く温和なる常格と放もて雄壮なるが新古今時代の風調か相協ふ夏も有て閑然すべからざる至常の語少らの人へ帰る時の家芭ふ書て与ふるよし巻首にえるせ内語美濃の家褄か一もじをもがそず又當時の哥れ風躰為家為兼兩郷の門風の子細等いと委しく論弁せり美濃尾張二つの家褄眼のつけどころ懸隔ちつきバ其説も殊か相背けど彼も此もさはべき道理備れバ近調家共に熟覧せまかしき書どもん。文政二年四月石原正後序ハて鏡面王経れる盲人象と撰る比譬とひきて一巳よかさよる哥人と讃れり

發行書肆

江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同　日本橋通二丁目　須原屋新兵衛
同　淺草茅町二丁目　須原屋伊八
同　日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
同　両國横山町三丁目　和泉屋金右衛門
同　芝神明前　和泉屋吉兵衛
大坂心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　心齋橋通安土町　河内屋和助
同　心齋橋通博勞町　河内屋茂兵衛
同　心齋橋通安堂寺町　秋田屋太右衛門
京都麩屋町通姉小路上ル　俵屋清兵衛
尾州名古屋本町通七丁目　永樂屋東四郎